

第 235 回研究報告会（2月 28 日）

第 235 回研究報告会は、報告者に大竹恵美子天理大学国際学部准教授を迎え、「日本を語る－ハーンとチェンバレンー」と題して行われた。「日本」を軸として2人の英国人、ラフカディオ・ハーンとバジル・ホール・チェンバレンの出会いと後年の彼らに対する評価についての発表であった。

ラフカディオ・ハーン（1850～1904）は、63年には英国セント・カスパース・カレッジに入学。66年左眼を失明する出来事があり、遺されている写真は右側を向いたものばかりとなった。67年カレッジを中退して渡米、新聞記者となり、殺人事件を扱った記事で名を馳せた。当時有色人種との結婚が禁じられていた米国で黒人女性と正式に結婚するが2年ほどで破綻し、90年に来日、松江で英語教師となる。この就職にチェンバレンが関わっている。翌年小泉セツと結婚し、熊本の第五高等学校、神戸クロニクル社を経、96年家族に財産を遺すために帰化し、小泉八雲に改名。東京帝国大学に職を得て上京するが、帰化したハーンは、日本人と同じ給与で働くようにいわ

れ辞し、1904年早稲田大学の講師となったが、同年9月死去。

一方、ハーンと同年に英国ポーツマスに生まれたバジル・ホール・チェンバレン（1850～1935）は、1869年病弱のためオックスフォード大学への進学を断念し、銀行に勤務するが、健康回復のため、ヨーロッパ各地を療養旅行、73年来日。海軍兵学寮で英語教師をし、その間『英訳古事記』を著した。86年からは帝国大学で教鞭をとり、90年には『日本事物誌』（*Things Japanese*）を出版。同年新聞記者として来日したハーンは、就職の条件が合わずに契約を破棄した。ハーンからの相談を受けたチェンバレンは、島根県尋常中学校及び師範学校の英語教師の職を紹介している（明治23年にチェンバレンがハーンに宛てた書簡が昭和14年発行の南陽堂目録で見つかった）。

後年、日本を軸として2人が取り上げられる時、ハーンが評価されるとその対極としてチェンバレンは言及されるのみで、単独での取り扱いはない。ハーンが日本人を理解しようとする態度で日本を紹介しているのに対し、チェンバレンはあくまでも西洋の価値観に立って日本を評価するという、2人の「語り」の態度の違いが、そこにあるのではないか。（堀内記）

第 19 回宗教研究会「現代世界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題（2）」（3月 19 日）

標記のテーマの下に始まった第2回目の研究会では、天理よろづ相談所病院「憩の家」緩和ケア認定看護師の松尾理代氏をお招きして、同病院における緩和ケアの現状について、症例報告も交えながら講演をしていただいた。松尾氏は現在、同病院のがん相談支援センター看護師長、また緩和ケアチーム副責任者を務められている。

まず最初に松尾氏は、天理よろづ相談所病院「憩の家」（以下、「憩の家」と略記）が奈良県のがん診療連携拠点病院として運営されている現状について報告された。

がん診療連携拠点病院では、がん対策基本法に基づき、がんに関する様々な悩みについて必要な情報を提供する相談支援センターを設けている。「憩の家」の場合、2009年度のがん相談件数は324件、その主な内訳は家族からが135件、患者からが107件、院内看護師が32件、院内医師が30件となっており、内容的には数の多い順から在宅ケアや緩和ケア病棟などの療養場所の問題、介護者の問題、社会的な問題、精神的な問題、身体的問題、がん治療等の問題など、実に多岐に渡っている。

次に松尾氏が紹介されたのは、「憩の家」の緩和ケア提供体制としての緩和ケアチーム医療の現状である。

「憩の家」では病院長の下に包括的ケア管理委員会が組織され、その中の一つが緩和ケアチームであり、これは多職種による組織横断的な活動を行う全人的包括医療の充実を目指す一環としてある。緩和ケアチームは現在、医師、薬剤師、看護師、精神科医、臨床心理士、ソーシャルワーカー、理学療法士、事情部講師、栄養士という9つの職種、総勢20名からなる医療チームである。（松尾氏はこの中で、チーム専任看護師である緩和ケア認定看護師の職務を担当され、チーム全体の副責任者である。）

そして3番目として、松尾氏は、この緩和ケアチームで関わっ

てきた幾つかの具体的な症例について触れ、がん患者やその家族と関わる中で体験されたこと、学び知ったことについて述べられた。

がん患者にとっては、身体の一部やその機能の喪失、自立や役割の喪失、愛する人の喪失など、喪失体験の連続が起り、ともすれば悲嘆と絶望の中に陥りやすい。それを支えるのが多くの場合、家族の絆なのである。松尾氏は、末期がんになっても自分の体験を話すことで看護学生の教育に貢献した男性の話、後に残される娘たちのために20歳までの誕生カードを書いた若い母親の話、また親子で楽しんだ思い出の温泉を最後にもう一度家族皆で分かち合った話などを紹介された。いずれも心温まる感動的な話で、所員も深い感銘を覚えながら松尾氏の話に聴き入った。

その後、私（金子）が「宗教系病院における宗教的ケアとスピリチュアルケア－心魂の世話取りの諸問題－」と題してコメントを述べた。身体的苦痛と心魂の苦痛とは連動しているところがある。したがって、苦痛の域値も家族や周囲の人々の支えの有無で変化する。自分は見捨てられているのではないか、という苦しみや喪失感を和らげるためには、こうした人々の支えは不可欠である。また「憩の家」では、事情部講師が担当しているが、そこでの病の論しの位置づけ、さらにはその意味についての問題や医療スタッフへの心のケアなどに言及し、宗教系病院における「心魂の世話取り」のあり方に問題提起を行った。

質疑応答では、「憩の家」での医療スタッフと事情部講師の関係性や同講師の今後のあり方について、また第二の患者とも言える家族の支え、とくに家族へのグリーフケアについて、さらに在宅ケアの際の行政との関わりなど、様々な問題が論議された。今回の研究会は、臨床医療現場からの貴重な報告を聴かせていただく内容であり、実践教学に関わる教学研究者にとって大きな刺激と啓発を受けるものであった。（金子昭記）

## 第7回伝道フォーラム「ネパールの天理教」（3月25日）開催

標記フォーラムは、天理教海外部の後援を得て、天理大学研究棟第1会議室を会場に開催、56名の参加者があった。また、発表者や道友社写真課の協力を得て、会場前の廊下を利用して写真展を行った。

フォーラムは、3月11日の東日本大震災犠牲者に対し黙祷した後、深谷忠一おやさと研究所長の開会挨拶に始まった。大向良治ネパール連絡所初代所長の基調講演をメインに、海外部翻訳課の成田道広氏による「天理教ネパール布教の現況」、天理大学に在籍する2人のネパール人留学生による発表があり、佐藤庄司海外部アジア1課長の閉会挨拶で幕を閉じた。

大向氏は、二代真柱の幅広い交流から、1950年代に2人のネパール人がおぢばを来訪したことを紹介。そのうちの1人クリシュナ・バルマ氏の弟、ラム・バルマ氏が、1958年天理大学選科日本語科（当時）に入学した。ラム氏は1964年に「おさづけの理」を拝戴し、初めてのネパール人ようぼくとなった。また、1960年、奈良ホテルに滞在されていたマヘンドラ国王（当時）を訪問され、その年に第1回目のネパール巡教があった。ビレンドラ皇太子は東京大学に留学、その際、共に学んだ故松本滋氏（天理教谿郷分教会前会長）と交流を深められた。

このように、二代真柱の国際的な交流から生まれたネパールへの天理教の布教は、1966年2月にネパール連絡所を開設することになり、その初代所長に大向氏が就任。11月には二代真柱の2回目のネパール巡教（ヨーロッパ・アフリカ途上）が実現し、その後も真柱の深い親心に支えられた。1967年11月に二代真柱は出直されるが、その7月には、おぢばにビレンドラ皇太子を迎えられ、11月13日には王族シャハ殿下が兄弟でおぢばを訪問、二代真柱と面談されている。

1968年、大向氏はネパールの「インター・ナショナル・ランゲージ・スクール」の日本語教師となり、ネパールに居住するための土台を築いていった。その後、ネパールの日本語教育を先導し、1986年にはネパールから「教育功労賞」を授与された。1968年12月には、ユーラシア大陸横断中の青年会あらかきとうりょう号2台がネパールを訪問した。

ネパール連絡所は、はじめカマル・ポカリーにあったが、1976年にラジン・パトに移転、さらに1983年にラビ・バワンに移ったが、大向氏は、1996年5月ネパール連絡所2代所長に相馬七郎氏が就任するまでネパール連絡所長を務められた。

成田氏は相馬所長時代にネパールに滞在し、連絡所の業務の傍ら、ネパール語を習得し、留学経験を経て、現在天理教海外部翻訳課に勤務。パワーポイントを用いて話をすすめ、まず、ネパールという国の位置を示した。その上で、ネパールについて概説、小国ではあるが、多民族、多言語国家である国としての特徴を示し、そこに住むネパール人の寛容という性質について説明。ネパール人の寛容は宗教に対しても寛容であって、「ヒンドゥー教や仏教を信仰しながらもお道の信仰をすることにあまり抵抗を感じないようです」とし、「お道に関係する多くの方は、既存の伝統宗教に基づく習慣や風習、信仰活動を踏襲しつつ、その上に自覚的信仰としてお道と関わっておられる方が

多い」と感想を述べた。そして、「そもそも改宗という概念があまりなじまないネパールの宗教土壌（これはヒンドゥー教の持つ本質的な特徴かもしれない〈つい最近まで、ネパールはヒンドゥー教が国教だった〉）では、そのような重層的信仰が何ら問題にならないわけで、その意味では、ネパールの社会においてお道だけを信仰するということは、逆に社会や親類縁者との関係断絶を意味するのかもしれない」と指摘し、「『調和しながらも住み分ける』、つまり『和』と『分』の構造こそがネパールの宗教的地平を理解する上でのキーワードになる」との意見を述べた。

その後、現在ネパールで活動している天理教の拠点（天理教ネパール連絡所（本部）、東ネパール真明講（東大教会）、名古屋ネパール布教所（名古屋大教会）、御津ネパール母屋（御津大教会）、カトマンドゥ布教所（南海大教会光司分教会）の活動を映像で示しながら紹介し、最後に、ネパールにおける天理教の布教について「今後の展望」としていくつかの提言を行った。

ビボール・バルマさんは天理大学国際学部に通う学生で4月から2年生になる。ラム・バルマ氏の息子で、ラム氏がガンの治療のために来日し、日本で療養したとき接した天理教の人々に対して「天理教の教えの何が、人々をそこまでたすけへと向かわせるのか？」という思いが生じ、いつか天理に来て修養科に入ることを自分自身と母に約束したという。1994年TLIに入学し、1年間の日本語や天理教の勉強のあと一旦帰国、2009年の修養科を経て、天理大学で学ぶこととなった。この先、父ラム氏の生き方を誇りに想いながら、大学在学中に天理教の教えを学び、理解することに努力したいと語った。

ラジェンドラ・タパさんも天理大学国際学部に通う学生で、4月から3年生になる。彼は、ネパールにいた時、天理教の教えに触れた。カトマンドゥ布教所の講社祭に初めて参拝したとき、神様が人間をなぜ創ったかという話を聞いた。2005年英語修養科に入り「おさづけの理」を拝戴し帰国。「おさづけ」で人を助けることができ、天理教を自分の信仰と決意した。2006年前期講習受講、2007年TLI、日本語修養科などを経て、教えを学びながら、にいがけに励む日本での生活を紹介。現在では大学生生活の充実を図るとともに、帰国後人々と吹奏楽団を結成したいと各種の楽器演奏を習い、また、祭典に雅楽を奉じたいとの思いから笙と箏も習っているということだった。

（堀内記）



フォーラムの講師を囲んで

## 第 236 回研究報告会 (3 月 28 日)

金子 昭

標記研究会において、「歴史的イエス探究の格闘史としてのイエス伝研究史—『教祖研究』を意識しつつシュヴァイツァーのイエス伝研究史を読む—」と題して発表した。

この発表では、18 世紀後半から 20 世紀初めにかけて登場したイエス伝のさまざまなアプローチについて、シュヴァイツァーが行った学問的検証と、彼自身によるイエス伝を紹介することを通じて、現代における我々の「教祖研究」にどのような示唆を引き出すことができるかという問題を検討した。

イエス伝研究が問いかける問題は、「信仰のキリスト」と「歴史上のイエス」との分離、およびその分離以降の関係確定であるが、これは、あらゆる宗教の「教祖伝」に通底する問題である。教祖の歴史的姿が、歴史批判的研究によって再構成されたとき、教義において確定された信仰対象としての教祖と齟齬が生じる。ここで問われているのは、教学研究は歴史批判的研究をどう受け止めることができるのか、という問題である。

歴史批判的研究には信仰的前提がないというような“断罪”は、あまりに素朴な姿勢であり、教学研究そのものの学問的価値をかえって損なうものである。キリスト教神学、とくにプロテスタント神学のイエス研究は、この難問を切り抜け、歴史批

判的視点を採用して、批判的かつ柔軟な研究姿勢を取り入れてきた。シュヴァイツァーによるイエス伝研究史から我々が学ぶべきなのは、そうした批判的かつ柔軟な研究姿勢なのである。

シュヴァイツァーは、大著『イエス伝研究』において、実に種々様々なイエス伝を取り上げている。時代状況によっては、イエス伝を研究するという自体、研究者生命を賭けたきわめて危険な試みでもあった。しかし、そうした勇氣ある探究からこそ、真の学問的進展が生みだされることを明確に示したのがシュヴァイツァーなのである。歴史における“不都合な真実”から目をそむけるような信仰は、しよせん“小さな信仰”にすぎない。これは、神学者として、否、真理の探究者として、実に勇氣のある力強い姿勢である。私は博士論文以来、彼の探究姿勢から多くのものを学んできたが、その最大のものがこの真理への忠誠に基づくあくなきチャレンジ精神なのである。

発表そのものは、シュヴァイツァーのイエス伝研究に即して行った。歴史的イエスの探究という形でのキリスト教神学における問題提起をふまえ、『イエス伝研究史』における主要なイエス伝の検討、シュヴァイツァー自身の徹底的終末論に基づくイエス伝、そして彼のユニークな論文「イエスの精神医学的考察」について順次論じた。その後の質疑応答においても活発なやり取りが行われた。

## 南米出張調査報告

野口 茂

伝統的なカトリック文化圏として知られるラテンアメリカにおいて、近年プロテスタント系をはじめとする新たな宗教が流入し、徐々にその勢力を拡大しつつあることが、これまでの研究で指摘されてきている。そのため 3 月におこなった出張調査では、ベネズエラ社会においてどのような宗教変動が起きているのか、その概要を把握することを出張の主たる目的とした。

現地では、他宗教の動向に関心をもつカトリック教会関係者や研究者も多いが、いまだ十分な研究の蓄積はなされていない。そのため今回は、できるだけ多くの大学研究者と接触して情報収集に努め、今後の調査研究に向けて彼らとのネットワークを築くことに重点を置いた。

また、宗教変動を俯瞰するという長期的かつマクロの視点からと同時に、ミクロの視点にも立って、カトリック教会がこれまでベネズエラ社会に対してどのような貢献をなしてきたのかについても調査をすすめた。

具体的には、長年にわたり低所得者居住区（スラム）において教育活動を続けるキリスト教系 NGO・FE Y ALEGRIA（信仰と喜び）に着目した。同 NGO は、1955 年カラカス市のスラムに一人のイエズス会神父によって小学校が開設されたことが嚆矢となった。以降、この活動は急速に拡大し、現在ではベネズエラ国内に 165 ヶ所の他、ラテンアメリカ 17 ヶ国に合計 1,600 ヶ所以上の活動拠点を設けるまでに至っている。参与観察のために訪ねることができたルイス・マリア・オラソ小学校は、ふだん居住者以外が足を踏み入れることが困難なスラム街にあった。一種独特な雰囲気が漂うために当初は緊張したもの

の、想像以上に校舎内はきれいに整備されており、子供たちも明るく素直で規律も正しく、教育の質の高さが窺えた。治安が悪いゆえ、時に身の危険を感じながらも、家庭的・経済的問題を抱える多くの子供たちを献身的にサポートするスタッフの姿に感銘を受けた。

カトリック教会は長年にわたり、こうした教育活動をはじめ医療や保健・福祉・人権擁護の分野など、多岐にわたる活動を展開し社会に大きく貢献してきていた。にもかかわらず、いま多くの人々がプロテスタント系の教会やさまざまなスピリチュアル（宗教的）なものに向かうのはなぜなのか。また、そうした状況をカトリック教会側はどのように認識しているのだろうか。

ベネズエラカトリック司教協議会のホセ・ルイス・サラテ副事務局長は、教勢停滞の要因として、歴史的に脆弱なベネズエラの教会組織や司祭数不足、宣教司牧に対する消極的な姿勢ゆえに、十分に信徒からの要請に応じてこれなかったこと、そして近年では社会主義化をすすめるチャベス現政権とも対立関係にありさまざまな制約を受けていることなどを挙げてくれた。また、呪術的な要素を巧みに取り込み、献金との対価に安易な現世利益を信者に吹聴する一部のプロテスタント系教会には警戒感を示しつつも、カトリック側としては、教会につながる信徒組織を有効に活用しながら、今後人々のさらなる教化に努めていくことを明らかにしていた。

伝統的な教会志向型宗教と、あくまでも個人的即時的救済を求める多くの国民、そしてその需要に応える形で影響力を拡大するプロテスタント系教会といった三者の関係が、これからどのように展開していくのか、今後も注視していきたいと考えている。

宗教者災害支援連絡会（宗援連）設立集会に参加して

金子 昭

宗援連の目的と集会の様子

未曾有の惨禍をもたらした東日本大震災に際し、我が国の宗教教団や宗教者はそれぞれの立場で様々な救援・支援の活動を行っている。これらの活動をするにあたって、諸宗教相互に連絡を取りあい、情報の共有をはかるネットワーク組織として、宗教者災害支援連絡会(宗援連：代表者は島蘭進・東京大学教授)が4月1日に正式発足した。

その前日の3月31日、東京の浄土宗明照会館にて関係者20名による発足式(設立集会)が開催され、天理教からは岩田長太郎総務部長、同総務課の鈴木正一氏、そして金子昭が参加した。他の主な参加者は日本宗教連盟傘下の伝統仏教、教派神道、新宗教、キリスト教などの関係者で、今後事務部門を担当する東京大学などの教員と学生も加わった。

宗援連は、①東日本大震災や福島第一原発事故の避難者の宗教施設への受け入れに関する情報、②被災地に残る人や避難して郷土から切り離された人への支援についての各宗教の情報を収集し、インターネット上で公開することで、広く被災者の方々に役立ててもらおうことを主たる目的とする。

具体的な情報共有と発信の手段としては、facebookとGoogle マップを用いて被災地情報の集約と各宗教による支援・受け入れ状況のマッピングに実績をあげている「宗教者災害救援ネットワーク」(代表者は稲場圭信・大阪大学准教授)と連携し、これに加えて新たにSNS(Social Network Service)を立ち上げることによって、それぞれ独自に活動する諸宗教間での情報交換や緩やかな連携を行うことになった。これらの作業手順については、稲場氏および岡田真美子・兵庫県立大学教授よりパワーポイントを用いて説明がなされた。

設立集会では、宗教団体や宗教者による被災者の受け入れ支援状況、受け入れ支援計画の状況、被災地での支援活動の状況について、参加者より報告が行われた。天理教については、教会本部が天理市や奈良県と連携し、3,000人の被災者を市内の信者詰所などに無償で受け入れることに決めた旨、岩田総務部長から報告がなされた。

また、政府の下で発足した「東日本大震災全国支援ネットワーク」(被災者支援で活動するボランティア団体、NPO、企業のネットワーク組織)に、宗援連も加盟することが決められた。

さまざまな意見交換

設立集会では、参加者により様々な意見交換が行われた。支援のあり方についての主な意見としては、次のようなものがあった。

「伝統仏教には社会習俗に根差した葬祭支援というニーズがあるが、新宗教にはそうしたニーズがなく、もっぱら寄り添い支援で取り組まなければならないのではないか。」

「原発事故の影響がこれからも続くので、受け入れ場所も長期的視野で考えていかなければならない。そうした長期的な受け入れの拠点に、教会や寺院がなれるかという本質的問題もある。」

「現在公的な支援を受けず自立した経済的支援をしている宗

教教団の負担は大きい。それらへの支援をどうするかということも考えるべきである。」

また、宗援連の実際の業務になるインターネット上での有効な情報の収集と提供に関しても、次のような意見が出た。

「避難所の受け入れは時々刻々と変化するので、ネット上での情報の蓄積も陳腐化するという心配がある。被災者にとっては、最新のものだけが有効ではないか。」

「刻々変化する状況活動情報については、なるべくそれぞれが主体的にシェアすることによって、現地で活動する各宗教者、NPOがよりよい支援活動ができると思う。実際に、現地ではすでに宗教を超えての連携がマップやネットワークの情報をもとに行われている。」

「現地で活動している宗教者がネット上の情報を見ると、自分ひとりではない、社会が見てくれている、エールを送っていていると感じることができるだろう。それによって現場で心の折れそうな人たちを支えられるのではないか。また被災地に向かえない信者たちも、情報をみて苦難にある人たちへ心を寄せ、また活動をしている人と心を共にできる。」

設立集会では様々な意見が出たが、宗援連は、それぞれの宗教者や教団としての取り組みを尊重しつつ、宗教者個人や単一の宗教施設、単独の宗教教団では困難なことについて情報交換しながら連携して取り組んでいくネットワークとして、意義のある役割を果たしていくことができる。この基本的な方向性においては、参加者一同の合意を得たように思う。

連絡先事務局とHP

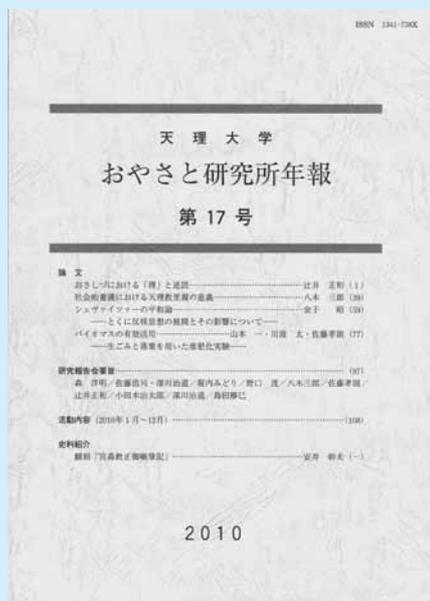
宗援連は今後、情報交換連絡会を適宜開催して、お互いに顔の見える関係の中で、課題の検討と相互協力について話し合う予定である。また同会は、さしあたっての事務局を(財)東京大学仏教青年会内に置くことになった。

- ・宗教者災害支援連絡会(宗援連)事務局：(財)東京大学仏教青年会内
- 〒113-0033 東京都文京区本郷3-33-5 三菱UFJ ニコス本郷ビル2F
- (電話) 03-3813-5903 <http://todaibussei.or.jp/access.html>
- ・宗援連ホームページ：<http://www.indranet.jp/syuenren/>



浄土宗明照会館会議室での設立集会の様子(宗援連提供)

# 新刊案内



『天理大学 おやさと研究所年報』第17号

本書には4本の論文をはじめ、2010年の研究報告会での発表要旨、研究所の活動記録、史料紹介が掲載されています。

本書を希望される方は、おやさと研究所事務室へお申し出ください。

その他の書籍は、おやさと研究所事務室、天理大学売店（テンフィフティ）、道友社各販売所でお求めいただけます。

## 『グローバル天理』合本のご案内

これまで出版された『グローバル天理』の合本を販売しています。これは2000年から2010年までの各1年分(12号分)を1冊にまとめ、簡易製本したものです(頒価は200円)。

毎月25日の公開教学講座の会場と、研究所事務室のみで取り扱っていますので、お求め下さい。郵送による販売はお断りしております。お問い合わせは郵便かFAX、もしくはメールにてお願いします。

### 問い合わせ先:

〒632-8510 奈良県天理市柚之内町1050  
天理大学 おやさと研究所

『グローバル天理』編集部

Fax: 0743-63-7255

E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp



『伝道参考シリーズXXII 「みかぐらうた」の世界を味わう』(頒価1,000円+税)

平成20年・21年度の公開教学講座(「みかぐらうた」の世界を味わう)の内容を核に、加筆訂正された論文集。



『伝道参考シリーズXXII アメリカスの天理教—南北アメリカにおける伝道の諸相と展望』(頒価1,000円+税)

2008年から2010年にかけて開催した研究会「アメリカスの日系宗教」の成果の一部をまとめた報告書。



『「二つ一つ」の環境学—エコロジーをグローバルに考える—』(頒価850円+税)

2000年から2010年にかけて、佐藤孝則研究員が本誌『グローバル天理』で連載した論考をまとめた新書。



『コンゴ伝道の諸活動—地域社会への貢献と教えの深化—』(頒価800円+税)

2010年2月26日に開催された第6回伝道フォーラム「コンゴ伝道における諸活動」の内容をまとめたもの。

家庭の崩壊 地雷 虐待 環境破壊  
 DV 孤独死 AIDS 老々介護 ギャップ 戦争 自殺  
 核兵器 フルイ 南北問題 温暖化 新型コロナウイルス

# 現代社会と天理教(2)

天理大学 おやさと研究所 平成23年度公開教学講座

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしたいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となっており、「我さえ良ければ、今さえ良ければ」の風潮を拡大・助長する危険性をはらんでいます。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。

この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づく生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考え、今年度は後半として下記テーマに基づいて講座を開講します。

第1講 4月25日(月)

佐藤浩司 自死 ―死ぬなよ

自ら死を選び、実行する人が後を絶ちません。我が国では、若年層から高齢者まで年々増加の一途を辿っています。国民あげてこの問題に対しての良策を探っています。自死を思い止めることができるのは何でしょうか。与えられた生をそのまま全うするために。

第2講 5月25日(水)

森 洋明 つなぎ—デジタル化社会のアナログ思考

さまざまな分野におけるデジタル化の波は、日常生活の中で私たちの物の見方や考え方に大きく影響しているのではないのでしょうか。そこで、アナログ的な姿勢としての「つなぎ」のあり方を見直し、その重要性を再確認したいと思います。

第3講 6月25日(土)

辻井正和 古い道と新しい道の間

1980年前後から日本の社会や人々の意識が大きく変わりました。しかし、「古き道があるから新しい道がある」と言われるため、新しい展開にはいつも疑問が呈されてきました。「古い道」と「新しい道」の関係はどう理解するのか、おさしづに基づいて検討してみたいと思います。

第4講 7月25日(月)

佐藤孝則 教えに基づく環境保護活動の実践例

環境問題は多岐にわたる学際的課題であり、その因果関係は複雑です。まして、価値観が多様化する今日では、解決策を見出すのは容易ではありません。しかし、教えに基づいた生き方はそれほど複雑ではないと考えます。実践例を通して考えたいと思います。

第5講 8月25日(木)

金子 昭 “無縁社会”への処方箋  
—「たすけ合い」社会再構築に向けて—

年間の自殺者3万人、孤独死3万2千人。家族のさすな、社会の結びつきが解体しつつある今日、今こそ天理教者が内なる世直しの波を巻き起こし、互いがともにたすけ合う世の中へと建て替えていく旬が来ました。NPO・NGOを活用するなど、新しい社会だけの処方箋を皆様と共に考えてまいりたいと思います。

第6講 9月25日(日)

野口 茂 世界の難渋に心を寄せて  
—いま求められる共感の力—

貧困や自然災害、紛争など世界の難渋に心を寄せて、ひとの難渋を我が事として地道に支援活動続ける人々が多いです。彼らの心に通底する共感の力に着目して、たすけ合いの意味を改めて考えてみたいと思います。

第7講 10月25日(火)

井上昭洋 おちばがえりの巡礼論

宗教の聖地を巡る旅を巡礼と呼ぶならば、おちばがえりも巡礼と言えます。おちばがえりを巡礼と捉えたと何が現れて来るのでしょうか。おちばがえりの歴史を振り返り、現代社会における巡礼の意味、私達にとってのおちばがえりの意義を再考したいと思います。

第8講 11月25日(金)

深川治道 選択と不選択—教えとともに生きる道

今日、様々な人々によって生成された多様な情報が提供され、多様な選択肢が我々に提示されています。このような状況において、身近な事例から我々自身のあり方の選択について考えたいと思います。

第9講 12月25日(日)

深谷忠一 かんろだい世界への道  
—目指すものとその道程—

新幹線で東京に行って、大阪に着いたかと思っただけで訪ねる先を探しても、ぜったいに見つかることはありません。また、大阪に着いても東京の地図を使っているのは、目的地を見つけることはできないでしょう。私たちの目指す「かんろだい世界」はどういうところなのか、そこに正しい道路マップはどういうものかを考えてみたいと思います。

場所：天理教道友社 6階ホール

時間：13:00~14:45

\* お車での来場はご遠慮下さい。

グローバル天理

第12巻 第5号 (通巻137号)

2011 (平成23) 年5月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan